

普遍の法・特殊の機

——浄土の經典(二)——

金子大栄

『教行信証』は「願真實教者則大無量壽經是也」ということから開説せられた。それは『大經』以外の經典はすべて未願真實教であるということである。『觀』『小』二經を方便教と予想してのものではない。方便教とは未願真實教を願真實教へと誘引するものである。したがって真實教ならば方便教はない。また未願真實教は即ち方便教であるともいえないのである。

その真實教といわれる意味は「如来の本願を説いて經の宗致となし、即ち仏の名号を以て經の体とする」からである。そこには真實は普遍の法であることが願わされている。如来の本願とは一切衆生の救わるる道理因縁であり、仏の名号とはその本願を成就せる如来の名告である。したがってその名号を法としていくことに於て衆生は救われていくのである。しかればそこに『大經』と呼ばれる意味もあるものであろう。大は普遍を義とするものである。これに依りて『無量壽經』という名も、衆生にとりて永遠の命となるものと解してよいのであろう。こうして「願真實教者則大無量壽經是也」と深い感激を以て開説せられたのである。

これによりて出世の大事ということが明らかにせられた。釈迦出世の意味とは、世界史上に於ける釈迦の存在を問題とするものである。それは過去の偉人としてではない。いま現にわれらを感じしつゝある仏陀である。したがって釈迦というもその徳において阿弥陀である。われらは釈迦の出世によりて阿弥陀の本願を知れるのであるが、それは即ち阿弥陀の本願ありて釈迦が出世したということである。それが古来二尊一体といひ伝えられた意味であろう。

されどそれは釈迦に限るものではない。諸仏の根本精神は阿弥陀である。したがって阿弥陀というも個仏の名ではないであろう。これに依りて『大経』の異訳には『仏説諸仏阿弥陀三那三仏薩樓仏檀過度人道経』というのがある。その諸仏阿弥陀の名に於て普通の徳が現わされ、三那三仏薩樓仏檀の名に於て普通の意味を明らかにし、そして過度人道経の名に於て普通の用を示すものであろう。こうして『大経』は普遍眞実を顯わすのであった。

二

しかれば『大経』を除いての余の經典は未顕眞実であるということは、即ち往生淨土の教を外にして普通の法はないということである。しかしそれは果してそうであるかどうかは一切の經典を検討して見なければならぬことかも知れない。少くとも『阿含』『般若』『法華』『華嚴』等の代表的經典に於て研究せらるべきものであろう。それは仏教史学の課題としてよいものである。すべての仏教はその普遍的意義を明らかにするために展開せられた。そこに問は答えられ、答は更に問となつていようなものを感じせられる。それを見開くことが、ひとつの史観の眼であつてよいものではないであらうか。

釈尊の正覚は生死を超越してのものであるから、その法は普遍的意味をもつものに違ひはない。されどそれは出家学道を要とすることに於て特殊の道である。それは一般在家の証り得るものではない。そこに世間道と出世間道とが區別せられた。その世間道徳として要求されているものは善因善果ということである。これに対して出世間道は向涅槃

槃の八聖道である。それは如より来て如へと帰る如来の因果である。これに対して善因善果は生死を離れることのできない凡夫に願わしい衆生の因果である。

こうして仏教の教団は出家と在家とによりて形成せられることになった。しかして出家は在家に世間の道徳を勧め、在家は生死解脱の法を尊重し来れるのである。されど出家を聖者とし、在家を凡夫とする区別はそれに依りて徹底されてはいない。したがって大乘教というも、いかにしてこの差別を超えるかということにあったのである。

その徹底の為には、先ず以て生死解脱は出家の聖者に限るといふ誇りを捨てねばならない。それは仏法を自利に止めずして利他に普及せねばならぬということである。それが声聞・縁覚を小乗として、菩薩道を大乘と呼ぶこととなったのである。しかして生死解脱の法を身証し得れば、在家の生活もまた自利・利他の徳をもつものといわねばならぬのであろう。それを明らかにしようとするところに多くの大乘經典が編集されたのである。それは一方に於て仏法は大乘であつて小乗であつてはならぬことを明らかにすると共に、一方に於ては一乗であつて凡・聖を簡ぶものではないことを顕わそうとするものである。

ここに大乘經典は、文殊・普賢を理想とする所以が感知せられる。その文殊の智慧は法有に執えられる小乗教学を空観するものであるがそれこそ大乘菩薩の心境であるべきものであろう。その文殊の智慧に於て在家生活の上にも自利利他の意味をもち得ることを明らかにしようとするものが普賢の行願である。その普賢は遍吉であるから、そこに普遍的の仏法が見出されたに違ひはない。こうして文殊の大乘心は、普賢の一乗へと行現せるのである。

この事實は特に『華嚴經』に明説せられている。その「普賢行願品」に現われる五十三の善知識は、在家出家を簡ばざるものである。特に女性と長者とが尊重せられていることは看過すべからざることである。それらの善知識はすべて福徳円満の人格者であつて、現実にあるものとも思えない。されど文殊の智慧を与えられた善財童子には接する人の上にその福徳を感知したのであろう。それが善財という意味かも知れない。文殊の智慧とは、善意を以て物を見

るものであろう。その智慧の眼に於て婆須蜜多も、方便命も善知識であり、普賢の徳をもつものであった。

この意味に於て『華嚴経』の説くところは、まことに光明の世界である。如来は一切の法に於て正覚を成じ、山河大地と共に成仏せられた。世間の淨眼となれる仏は、世間に淨眼を与えられたのである。その光は明らかに無明の暗を破りての日光である。されど「普賢行願品」には暗に浸み入る星月の光として説かれている。しかれば普賢の行願というも、菩薩の精神であつて、衆生そのものは依然として煩惱業苦を離れることはできぬのであろう。こうして大乘は一乗であることを理想としつつ、現行できぬ憾みがあるのである。それは畢竟、如来の因果と衆生の因果との別は、いかにしても徹廃せられないからによるのである。

三

ここに思い知らるることは、その如来と衆生との因果を帰一せしめようとするものこそ淨土の教であるということである。そのことは已に諸大乘経に散説せられてある。『般若経』には「淨仏国土品」がある。龍樹の解説によれば淨土とは淨業による。自他内外の因縁によりて、身語意の三業を淨めることが、清淨の世界を形成することになるのである。『維摩経』の「仏国品」では、「直心はこれ菩薩の淨土なり、菩薩成仏の時、不諍の衆生は十方より来生す」ということである。これ即ち衆生を来生せしめる淨土を建立することが菩薩の行願であるということである。したがって淨土の場において菩薩と衆生とは一如となるのである。

されどこれらの経説は大乘精神を明らかにするものであつて、一乘道に徹したるものではない。莊嚴淨土を主として往生淨土を本とするものでないからである。それは聖道の菩提心を満足するものであり、この世を仏国にしようとするものである。これに対して純粹に往生淨土の法を説けるものこそ『大無量寿経』に他ならぬのであろう。そこにはひとつの方向転換というものが感ぜられるのである。

この経は上巻に如来浄土の因果を説き下巻には衆生往生の因果を願わしてある。ここに明知せられることは如来において浄土、衆生に於て往生ということが両者の因果を帰一せしめるものとなることである。如来浄土の因である本願は、衆生往生せずば我も正覚を取らないという誓いによるものである。その誓願に於て衆生往生の因果は成立するのである。したがって衆生往生の因である聞其名号に於て如来浄土の因果は現行するのである。こうして『大経』は往生浄土の原理と実際とを説き願わせるのである。そしてこれに依りて初めて仏教は一乗道となり、普通の法となつたのである。

しかるにその浄土教がいかにして仏教史上に現われることになつたかについては、いろいろと論究せられている。しかしその結果はどうであろうとも、それは仏教内部の要求に依るものであることに間違ひはない。そこに特に重要なものは阿弥陀仏の名である。本願も諸仏の名に於てである限りは、この世を浄土にということであつた。その限り仏法は指導者のものであつて、被指導者の庶民に取りては現世の幸福已上のものを求むるものとはならぬのであろう。本願が阿弥陀の名に於てせられた時その無限の大悲が深く群萌の願生心を喚起して、そこに如来と衆生との同証する浄土が見開かれることとなつたのである。

こうして私は出発点へ帰る。「如来の本願を説いて経の宗致となし、即ち仏の名号を以て経の体とす」。ここに『大無量寿経』の眞実教たる所以があるのである。その眞実とは即ち普通の法である。

四

しかるに聖道が仏法の本筋であるということから浄土教は凡夫のための特殊の法であると思はされて来た。それは誤りでないかも知れない。されどその限り仏法は普遍性のない特殊の法であるといわねばならぬのであろう。それはそれでよいのではないか。ただ仏法もまた普遍性をもつものでなくてはならぬとすれば聖者よりも、むしろ凡夫の道

となるものでなくてはならない。凡夫をそのままにして生死を超える道、それでなければ眞実普遍の法とはいえないのである。

普遍とはあまねくである。それはくまなく十方を照らす月光が葉末の露にも宿るようなものである。そこに如来浄土の因果と衆生往生の因果との対応が見られるのである。しかして、その衆生往生の因果として現行されるものはおしなべてのものである。そのおしなべてとは即ち衆生一般ということである。あまねき如来の法は、おしなべての衆生の道となる。そのおしなべてに満足しないものは、それ故にあまねき法を見失うことになるであろう。一般の道を成立せしめるものは普遍の法に他ならぬからである。

しかるに、「おしなべて」とは高きを押し低きを引き立てて並べるものである。したがってそこには一定の標準があるであろう。それは群萌といっても原始的な素朴さがあり、凡夫といっても心がけのよいものであらねばならない。それこそ善男子善女人といわれるものであろう。浄土を願うものは、その善凡夫でなければならぬ。『大經』に於ける三毒五惡の説はそのことを明らかにするものであろう。ここを以て貪欲・瞋恚・愚痴の煩悩はあつても、世間の人民父子兄弟夫婦家室中外の親屬に「当に相い敬愛して相い憎嫉することなく、有無相通して貪惜を得ることなく、言色常に和して相違戻することなかれ」と勧められている。それは人間苦の免れ難きを知らしめて「その善なるものを択んで」行わしめるものである。しかれば五惡というも人間の本能のままなる罪障であることを明らかにして、かえつて五善を勧めるものである。それは勤苦であるに違ひはない。されどその一生の勤苦は福德度世泥洹の道に近づくものであり、また兵戈無用の平和の世界を作ることにもなるであろう。こうして説かれたる善とは人間おしなべてのものであつて、特に三学六度というような仏法特有のものではない、それは庶民に要求されているものであり、群生の道とせられているものである。

これに依りて三毒五惡の説は、本願に除かれたる逆謗を語るものと解せられてきた。逆謗というも三毒五惡を根本

とするものである。それを反省して善を求むるものこそ本願に十方衆生と呼ばれているものであろう。その衆生こそ煩惱業苦のままに救われるのである。したがって三毒五悪を好むものは本願の正機ではない。それを反顧せば、善を求めるものこそ煩惱業苦を感知するのではないであらうか。そこにおしなべての道がある。おしなべてはいわば四捨五入である。煩惱業苦のうちにも道徳を求めている凡夫は五入せられる。されど三毒五悪を当然とするものは逆謗の徒であるから四捨せられるのである。

五

こうして「おしなべて」の道は独作諸善が要求されている。独生独死独去独来の人生にありては他を顧みることなく、自身の道を求めねばならぬ。それは当然のことといわねばならぬのであろう。されど道徳というも自他の因縁に於て行われるものである。善悪というも畢竟は業縁によるものではないであらうか。その業縁を感じる限り、われ独り善人であることはできない。それが人間といわれているものである。したがって往生浄土ということも、その人間の救われる法でなくてはならぬのであろう。浄土とは、そこに怨親の別は解消せられ、同証一味の場となるものであるからである。

ここには逆謗もまた除外することのできぬ人間業がある。その適例として説かれたるものは『観経』に於ける韋提希の立場である。仙人の殺害にも、わが子を産み落すことにも、父王にそむくことのできなかつた夫人には自主性がない。愚痴の凡夫であり、五障の女人である。されど親を殺害しようとせる我が子の行末が案じられ、いかに提婆を憎んでもその提婆が回心しない限りは、その提婆に誘惑されたる阿闍世も救われぬことであらう。それが「世尊われむかし何のつみありてかこの悪子をうめる。世尊また何の因縁ありてか提婆達多と眷属なりや」ということとなったのである。それは明らかに愚痴の繰言である。しかしそれはそのままに人間生活の懺悔である。この業縁関係にある

かぎり提婆、阿闍世も救われなければ、韋提希も真に救われるということはないであろう。されど、その救いの場は現生にはない。そこに来生の浄土が求められたのである。「しかれば淨邦、縁熟して調達、闍世をして逆害を興せしめ、淨業機あらわれて釈迦、韋提をして安養をえらばしめたまえ」るのであった。その縁を無視しては機は成立しない。その機ありて縁も意味をもつこととなる。その機縁によりて浄土教が顕彰せられるのである。

その機縁こそ人生である。一方から見れば人間の生活はただ縁によるように思われる。「さるべき業縁の催さば、いかなる振舞をもす」るのである。そこには何等の自主性もない。されどその振舞そのものには責任を感じざるを得ないものがある。それが宿業の悲しみである。とすればそこに自主性があるのではないであろうか。善も悪も周囲の情勢によることである。世の中が平和になれば、人心も平和になるであろう。されどその平和の世を作るものは人間の善き心である。その善き心がなければ平和の世も乱されるのである。しかれば苦といふ人も人間の心に依るものといわねばならぬのであろう。されど人は果していかなる情勢のうちにもありても、その自主性を失わずにおることができるものであろうか。おしなべての道はあっても、われらはしばしばそこから外れることあるを経験せざるを得ない。その経験こそ浄土の機縁である。

六

ここに韋提希が選択浄土機といわれる所以がある。それで、それは一般的の道徳では律することができぬものであるということに於て特殊の機ともいわれるのである。その自覚に於て愚鈍の衆生といい、その反省に於て無善造悪の凡夫という。それはすべて浄土の機であることを現わすものである。

しかるにその自覚といふ反省といふものは、人生経験に於て感知せられるものである。善を欲して善を得ず、悪を好まずして悪を作すという実際である。したがってそれは劣等感とか、敗北思想とかいうようなものではない。かえ

って常に無意識的な道徳感情がありて当面の行為を批判するからである。若しこの潜在的な作用がないならば、心からなる煩悩わづらひなまというものもないであろう。煩悩具足の凡夫とは、愛と憎しみとの離れないことの反省に於て感知せられるものである。しかしわれらは何故にこの反省をもたねばならぬのであろうか。

世には善を欲すれば善を作し得、悪を為さじと思えば悪を作さずにおることができると思っている人は多い。或は善いことをしたことはあるが、悪を為した覚えがない者も少くはないであろう。その人々に取りては愛すべきは愛し、憎むべきは憎むのは当然である。したがってかく思想している人々は、明らかに浄土の機ではない。更にその愛を近きより遠きに及ぼし、その憎を和らぐる法を求めていく。そこに聖道があるのである。

しかるにそれがおしなべての常識とすれば愚悪の凡夫と知り、愛憎の離れがたきを悲しむものは確かに特殊の機といわねばならない。それは個性的感情であるともいわれるであろう。されど個性的自覚は必ずしも浄土の機ではない。若し個性に着眼すれば、人々はすべて特殊の機であるともいえるのであろう。もともと、「おしなべて」とは、その特殊性のうちに一般的なるものを見出せるものに他ならぬのである。したがってその特殊性に着眼すれば人おのこの人生である。何人に取りても自叙伝は特殊のものであるに違いはない。したがってその特殊は一般を内含しているが、一般は特殊を尽くすことはできぬのであろう。その特殊を包容するものこそ普遍的なるものである。そして一般なるものは、常にその普遍を理想としているものである。

ここに浄土の機を思う。それは收拾することのできない人間苦の経験者である。しかしてその人間苦を代表するものとしては、愛別離苦を挙げてよいであろう。親を失い子を失えるものの悩みである。夫に死別し妻に先き立たれたものの悲しみである。それはそれぞれの係りに於て人間おしなべてのものであるに違いはない。されどそれは人おしなべてのものであるということで諦らめのつかないことに於て個人的のものである。特殊のものである。こうして個人が人間としての苦悩をうけ、一般的のものを特殊のものとして感知せざるを得ない。そこに現実なる人生経験が

あるのである。

されどそれは愛別離苦に限るものではない。問題は人間苦はいかにして解決されるかである。已にどうすることもできない情勢のうちにおいて、しかも思い諦らめることのできないもの、それが人間苦である。だから厭離穢土というも、ただ徒らに世を呪うものではない。かえって世の相に於て自身の責任と感ずるものである。それが愚悪の凡夫という自覚である。しかれば厭離穢土こそ人間生活の懺悔に他ならぬのであろう。したがって欣求浄土というも、「極楽はたのしむとききて願いのぞむ」ものではない。愛憎に於ける罪障の解消する場を求めているのである。それは如来の本願の世界として信知せられているのである。

七

こうして『大経』は普通の法を説き『観経』は特殊の機を顕わすものであった。その特殊の機とは人生に於て安住の地をもたぬものである。内、自身に於ても、外、世間に於ても頼むものなきことを感知するものである。それは何人に取りても、そのような人生であるといわれるかも知れない。されど多くの人々は何とかして突破しようとしているのである。それを一般的のものとするかぎり浄土を願生するものは特殊の機である。しかしてその人を特殊の機であらしめるものは、苦悩の体験を人生経験とするものである。

しかるにその特殊の機こそは普通の法を身証するものである。「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫已来常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と深信するものでなくては、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したもう。疑いなく慮りなく彼の願力に乗ずれば定んで往生することを得」という深信をうることができない。しかして『観経』はまさしくその特殊の機を縁として往生浄土こそ普通の法なることを暗示するものである。それが『観経』の方便教といわれる所以であらう。方便とは暗示であり、隱彰である。それは、暗示もしくは隱彰でなくては浄土の高次の世

界であることを明らかにする道がないからであろう。直接に普通の法を説ける『大経』にありては浄土の彼岸性が明らかでない。それを明らかにするものは、已にいうように苦惱の凡夫に求められている観想に他ならぬのである。それは観想であるかぎり方便であるに違ひはない。されどその方便でなくては眞実を彰われぬのである。その意味に於てその方便こそ眞実を顯わすものといつてよいのであろう。

普通の法は一般の道でないことに於て特殊のものである。されどそれは一般の道の根元となるべきものであることに於て至高のものである。最勝独妙の法である。特殊の機は一般の道を以て律することができぬことに於て、極悪最下のものである。されどそれは眞に人生を経験せるものであることに於て、一切の群生を代表するものである。したがつて特殊の機であることを信知するもののみが、苦惱の凡夫に對しての了解をもつものとなるのであろう。その了解ありて、一般の道も成立することではないであらうか。